

英語 (筆記)

単熟語の知識を増やし、読み解く速さを身につけよう。

I. 全体講評

今回のセンター試験本番レベル模試の平均点は105.5点で、前回と比べると微減であったが、この時期としてはまずまずの成績であろう。センター試験では英語の総合力を問われるので、集中的にせよ、長期的にせよ、弱点分野は各自で克服していかなければならない。ただし、受験生に共通する大きな課題には、まだ時間的な余裕があるうちに取り組んでほしい。そうした課題の1つは語彙力の強化であろう。今回は特に不振と言うほどの大問はなかったが、それとは別に指摘すべきなのは終盤の無回答率が高かったことである。第5問では3%弱までにとどまったが、第6問では6%台にまで及んでいた。終盤は時間的な余裕を失っていたということであろうが、これは当然英文を読んで理解する速さを反映し、そして読む速さは語彙力と直結している。毎年のものであるが、この問題は時間とともに

徐々に解消されていくであろう。しかし、そのための意識的な努力は不可欠である。ぜひ多読を通じてレベルアップを目指してほしい。

II. 大問別分析

第1問 発音・アクセント

カタカナ表記と異なる発音に要注意！

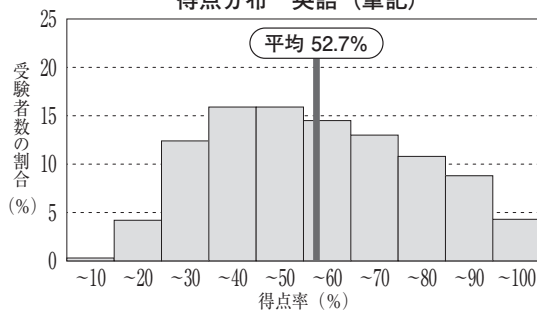
今回の第1問の得点率は54.5%で、平均的な結果であった。内訳を見ると、Aの発音問題の全体平均が57.9%、Bのアクセント問題が52.0%と、後者が少し低かった。小問別の正答率では、40%を下回った箇所がA、Bに1つずつあった。最も不振だったAのケースは母音字iに関する問題で、唯一長母音となる②machineryが正解であったが、③privilegeや④timidを選んだ人がかなりいた。これはmachineを日本語で「マシン」と表記することが影響した結果かもしれない。発音・アクセント問題では、しばしば日本語化した単語のカタカナ表記と英語本来の音声の区別が鍵を握る。今後も同様のケースを目にすることがあるだろう。あくまでも原音に忠実に、音読を習慣とするようにしてほしい。

第2問 文法・語法・整序作文・応答文完成

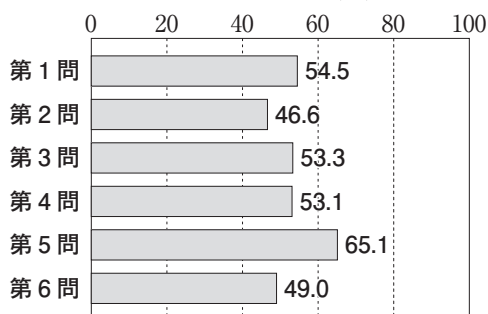
文法的知識の応用力を高めよう。

今回の第2問の得点率は46.6%で、極端に不出来というわけではなかったが、すべての大問の中では最も低かった。内訳は、Aの文法・語法・語彙問題が52.7%、Bの整序問題が36.2%、Cの応答文完成問題が46.7%だった。今回のAに関しては、正答率が40%台の小問が4つあったが、残りは50~60%台だった。それに対し、Bでは20%台、30%台が1問ずつあったのが大きく響いてしまった。Cの応答文完成問題にも40%に満たない小問が1つあった。これらの問題で共通して鍵を握るのは文法力である。Bで不振だった問1では〈be hard to do〉、問3では〈by+動名詞句〉という基本形をいかに応用するかがポイントであった。文法の知識は第2問全体の成績に大きく影響するだけでなく、読解

得点分布 英語 (筆記)



大問別得点率 (%)



問題征服のための基盤を成すものである。この分野に不安のある人はぜひとも早いうちに対策を講じてほしい。

第3問 文脈把握 (文削除・要約)

一文ずつのつながりに十分な注意を払おう！

今回の第3問の得点率は53.3%で、平均的な成績だった。内訳を見ると、Aの不要文削除問題が49.4%だったのに対し、Bの要旨選択問題は56.5%だった。小問別の正答率を見ると、40%台に留まったものがAに2問、Bに1問あった。その1つはAの問1であるが、正解の③に対し、④を選んだ人も30%ほどいた。正解を得られなかった人には、文のつながりという観点から本文を読み直して欲しい。この大問では、センター試験に特有の出題形式を用いているが、どちらの形式でも試されているのは文脈把握力であり、それは日頃の読解作業を通じて養う他はない。

第4問 説明文と図表・説明文書などの読み取り

本文の該当箇所をきちんとチェックしよう！

今回の第4問の得点率は53.1%で、やはり標準的な成績であった。図表を含む説明文を素材としたAについては、全体平均が56.8%、広告文書を素材としたBは49.3%だった。ややBの方が低かったわけであるが、これには正答率が5割を切る小問が3つあったことが影響した。最も正解者が少なかった問1では、絵画教室を選ぶのにあたって、「上のレベル」、「人物以外の題材」、「午後5時以降」という3つの条件から、③「コースC」が該当する。ところが、正解者とほぼ同数の人が「ポートレート(人物画)」を描く②「コースB」を選んでいて、本文との照合にもう少し注意してほしかった。

第5問 物語文の読解

この調子で確実に得点を重ねよう！

今回の第5問の得点率は65.1%で、すべての大問の中で最も良くできていた。小問別正答率を見ても、50%台から80%近くまでと全体的に高いレベルで安定していた。今後もこの調子を持続して、確実な得点源にしてもらいたい。今回に関しては、特に目立った反省点はないが、例年このあたりから無回答率が徐々に高くなっていく。今回も最後の小問では3%弱に達していた。落ち着いて考える時間が

あれば、決して難しい箇所ではないので、ここに至るまでの過程でいかに効率よく解答できたかが問われることになるだろう。

第6問 説明的文章の読解

時間配分を考えて全問解答を目指そう！

今回の第6問の得点率は49.0%だった。第2問に次いで低かったが、受験生にとって負担の大きい大問としては悪くないと言えるだろう。小問の中では、パラグラフ毎の見出しを答えるBが不振であった。最後の問題となるこの大問では時間的制約の影響が最も大きい。無回答率は3%台から6%台にまで及んでいた。例年言えることであるが、まだこの段階では全問を解くだけのスピードが身につけていない人が多い。そして、全問マークをした人であっても、確信を持ってない解答が多かったのではないだろうか。時間的な余裕さえあれば、決して難しい問題ではない。今後効率のよい解き方を覚えるにつれて、この最後の大きな大問でも得点を伸ばしていくことが期待される。

Ⅲ. 学習アドバイス

今回は第3問について述べておこう。この大問はA、Bの2つのパートからなり、それぞれタイプの違った素材文を用いているが、いずれも文脈把握力を試すのが出題の狙いである。Aの場合は、主に説明文を用いて、オーソドックスな形で文脈把握力が試される。ここではパラグラフ内の不要な一文を答えるわけだが、説明文タイプの場合、論理を追っていけば比較的答えやすいと言える。ただし、2018年の場合、ややストーリー性のある英文が1つ含まれていたのが注目される。それでも、論理的整合性に基づいて解答するという基本スタンスに変わりはない。こうした問題にうまく対処するには、パラグラフ内の一文一文のつながりを日々の学習でも努めて意識するようにすることが必要になるであろう。Bの場合は、複数の発言者による意見発表というスタイルをとって、素材文が示されている。ここではどちらかと言えば細部を総合し、話者の発言の全体的な主旨を理解したかどうかを試すものである。これも普段の習慣が大切で、まとまった量の英文を読む際には、パラグラフ単位の主旨をつかむことを心がけてほしい。